

幼児における主張的な情動表現の理解に関する研究

—怒りの表現に着目して—

平 川 久美子

本研究は、幼児の情動表現の理解を明らかにすることを目的とした。年中児39名、年長児56名を対象に、情動表現の動機を含む怒りの表現に関する2種類の課題を実施した。表情選択課題では3つのお話において主人公の表情を選択させた。お話の1つには主張的動機が、もう1つには友好的動機が、残る1つにはその両方が含まれていた。適切さ評定課題では2つのお話において主人公の動機に対する表情の適切さを評定させた。お話の1つには主張的動機が、もう1つには友好的動機が含まれていた。

本研究で得られた主な結果は以下のとおりである。

1. 年長児よりも年中児のほうがより強い怒りの表現を選択した。
2. 友好的動機場面よりも主張的動機場面のほうがより強い怒りの表現が選択された。
3. 年中児よりも年長児のほうが主人公の動機と表情との関連をより理解していた。

これらの結果より、年中児よりも年長児のほうが情動表現と動機との関連についてより理解していることが示された。

キーワード：情動理解、情動表現、主張的動機、怒り、幼児

1. 問題と目的

私達は日常生活において、怒りや悲しみ、喜びなど様々な情動を経験する。しかし、他者との関係の中で常にその情動をありのままに表出しているわけではない。自分の情動を隠すこともあれば誇張して表現することもある。年齢が上がるにつれて、私達は状況によって情動表出をその場にふさわしい質や量へと調整することが求められるようになっていく。情動表出の制御 (regulation of emotional expression) とは自分の目的に沿うように情動表出を操作することであるが、情動表出の制御にはいくつかの方法がある。Ekman & Friesen (1987) は、①実際の情動よりも表出の程度を弱める (調節)、②実際の情動よりも表出の程度を強める (調節)、③何も感じていないのにある情動の表出をする (擬態)、④実際の情動ではなくニュートラルな表出をする (中立化)、⑤実際の情動とは異なる情動の表出をする (隠蔽) などの制御ストラテジーを挙げている。このように情動表出の

制御には、情動表出を単に抑制するだけでなく、表出の程度を大きくするなどあえて表現するということも含まれる。この情動表出の制御は自他を守る機能をもっており (Harris, 1989)、他者との関係を良好に保つため、あるいは自分の立場を守るために必要なものであるとされている (平林・柏木, 1993)。したがって、情動表出の制御は対人関係を円滑にするものであり、社会性の発達において非常に重要な役割を果たしていると考えられる。

情動表出の制御に関するこれまでの研究によって、3、4歳児でもネガティブな情動表出を抑制し、ポジティブな情動表出をする (Cole, 1986) などの自発的な情動表出の制御は幼児期の比較的早い段階から生じていること、そしてこの段階の制御はまだ自動化されたものであり、子ども自身が意識的に行っているものではないことが明らかにされている。このような自動化された制御が認知的な能力の発達に伴って徐々に自覚的に行われるようになっていく。そして幼児期後期頃になると、子どもは対人場面において自分の情動表出を制御することの必要性を理解し、自分のとった行為が相手をどのような気持ちにさせるかを考慮した上で情動表出の制御を行うようになる (内田, 1991)。さらに児童期に入ると、誰に対して、どのような理由で情動表出を制御するかなどを意識化した上で、情動表出の制御が行われるようになっていくのである。

情動表出の制御を扱った従来の研究では、情動表出を抑制することに焦点が当てられてきた。そしてそこで検討されてきたのは、本当は嬉しいのに嬉しくないふりをするというような「ポジティブな情動を隠してニュートラルな表出を行う」、本当はがっかりしているのに嬉しいふりをするというような「ネガティブな情動を隠してニュートラルな表出またはポジティブな表出を行う」などの制御がほとんどだった。その一方で、前述の通り情動表出の制御には誇張などの表出する方向の制御も含まれるにもかかわらず、幼児における偽りの悲しみ表出の理解を検討した溝川 (2007) などの研究を除いては情動表現の主張的な側面についてはほとんど検討されてこなかった。一般に、悲しみ表出は望ましいものではなく、偽りの悲しみ表出が求められる場面もほとんどないと溝川 (2007) が指摘するように、とりわけネガティブな情動の場合、あえて表出するというような情動表現は社会的に要求されるものではないということもあり、そのような情動表出の制御にはあまり関心が向けられてこなかったのだろう。しかしながら、情動表出を抑制することが対人関係において肯定的な影響をもたらすことが多くの研究において指摘されてきた一方で、情動表出を抑制することが対人関係や精神的健康に否定的な影響を及ぼすという指摘もあり (崔・新井, 1998; 平林・柏木, 1993)、適切なやり方で情動表現を行うことは自分にとっても他者にとっても重要であると考えられる。

それでは、情動表出や情動表現にはどのような意味、機能があるのだろうか。まず、情動表出は表出者がどのような感情を抱いているのか、どのような信念をもっているのかなど様々な情報をそれを知覚する人に与える。このように情動表出の大きな役割の1つに伝達機能があるが、情動表出や情動表現が果たす役割はそれだけではない。幼児期後期の子どもを対象とした情動表出の機能についてのインタビューを行った久保 (2006) の研究では、怒りの情動表出については6歳時点では問題解決に向けての建設的な行動を喚起する機能についての言及が見られるという結果が示されてい

る。また溝川(2007)は、自己防衛的動機にもとづいて本当は悲しくないにも関わらず悲しみを表出することについては4歳児よりも6歳児のほうがより理解していることを明らかにした。さらに、この偽りの悲しみの表出が他者の誤信念を生み出すということの理解は幼児期以降、児童期中期までにかけて発達することが明らかにされており、幼児や低学年の児童は偽りの悲しみ表出を他者に誤った信念を抱かせるものとしてではなく、他者の何らかの行動を引き出すものとして理解している可能性が指摘されている(溝川・子安, 2008)。これらの研究結果から、情動表出や情動表現には他者に対して何らかの行動変容を求めるといような機能もあると考えられる。

既に述べたように情動表現の主張的側面を扱った研究はほとんどなされていないが、平川(2009)では、実際の情動よりも強めて情動表現を行う場面において、小学1・2年生の半数以上の子どもが謝罪要求や行動統制要求のような主張的な動機があると回答した。一方、自己制御(self-regulation)の研究では、行動レベルの自己主張は幼児期後期に1つの転換期を迎え、社会的にコンピテントな自己主張が可能になることが示されている(柏木, 1988; 山本, 1995)。また、年長児になるといつでも自己抑制することが良いのではなく、場合によっては自己主張すべきときがあると認識するようになることも指摘されている(子安・鈴木, 2002)。このような自己主張の発達を踏まえて考えると、幼児期後期頃から子どもは情動表出を抑制することの重要性だけでなく、状況によって適切に主張することの重要性もまた理解するようになっていくと推測される。したがって、本研究では幼児期において主張的な情動表現に関する理解がどのように発達していくのかを明らかにする。その際、従来の研究で扱われてきた抑制的な情動表現も同時に捉えて検討する。より具体的には、情動表現の主張的側面と抑制的側面を明らかにするために主張的動機と友好的動機を設定し、幼児はそれぞれの動機をもっている場合にどのような情動表現を行うと理解しているかを明らかにする。

本研究で実施する課題における情動表現の場面には、主人公が友達から被害を受け、怒りの情動が喚起される場面を用いる。一般に、対人場面において怒りの表出は抑制されるべきものであると考えられるが、怒りの適切な表出は他者との間に共感や相互理解をもたらし、対人間の信頼や親密さを増す働きがある(木野, 2003)。また木野(2003)は、怒りの表出は一時的には他者との関係を悪くする可能性があるが、今後も関係が持続することが予測される相手との間で度々同じような情動喚起状況に遭遇する場合には、相手とのコミュニケーションによって根本的な問題解決をすることが必要であると指摘している。このように現在の関係性だけでなくより長いスパンの中で相手との関係性を考えた場合、よりよい関係を築いていくためには適切に怒りを表現することがより一層重要になると考えられる。とりわけ、幼児期においては、怒り表出の機能について5歳時点では被表出者の泣きや怒りを喚起する、被表出者に嫌われるなど、ネガティブな機能に関する言及が多くみられるが、6歳時点では被表出者が怒りの理由を尋ねる、当事者が謝罪するなど問題解決に向けたポジティブな機能に関する言及が見られることが明らかになっている(久保, 2006)。このことを踏まえると、他者との関係において単に怒りを抑制するだけではなく、状況によっては適切に表現するということが非常に重要になり、怒りの情動表現が対人関係において果たすポジティブな役割についての理解が深まるのは幼児期後期頃からであると考えられる。したがって、本研究では

怒りの情動に着目し、幼児期における主張的な情動表現の理解がどのように変化していくのかを明らかにする。

2. 方法

対象児

仙台市内の2か所の幼稚園に通う年中児39名(男児17名、女児22名;平均年齢5歳0か月)、年長児56名(男児32名、女児24名;平均年齢6歳0か月)、計95名を分析の対象とした。ただし、適切さ評定課題の友好課題においては一部の対象児に対する課題の実施に不備があったため、適切さ評定課題の分析にあたっては、不備のあった対象児を除いた年中児13名、年長児27名、計40名を分析の対象とした。

調査時期

2010年10月。

調査方法

幼稚園の一室において個別法で実験を行った。課題は表情選択課題と適切さ評定課題の順に実施した。

課題

表情選択課題は情動表現の動機が与えられた場合にどのような情動表現を行うと理解しているかを調べるための課題として、適切さ評定課題は動機と情動表現との関連を理解しているかを明らかにするための課題として設定した。情動表現の動機には、主張的動機[もう同じことをしないでほしいと伝えたい]と友好的動機[友達を悲しませたくない]という2種類の動機を設定した。

(1)表情選択課題

この課題は、主人公が置かれた状況とそのときの主人公の動機から主人公の表情を推測する課題である。具体的には、まず3枚の図版を用いて友達から被害を受けて主人公が「怒っている」という状況と主人公の動機を提示した。次に、主人公の情動と動機についてもう一度確認した上で、「このとき〇〇ちゃん[くん](主人公)はどんな顔をするかな。普通の顔かな、あまり怒っていない顔

Table 1 表情選択課題の内容

課題	お話
主張	ななちゃん[じゅんくん]は積み木でお家を作って遊んでいます。そこへ友達がやってきて、お家を壊して積み木を取ってしまったので、ななちゃん[じゅんくん]は怒っています。今、ななちゃん[じゅんくん]は怒った顔をして今度お家を壊したらもう一緒に遊びたくないと伝えたいと思っています。
友好	さきちゃん[しんくん]は水遊びをしている友達の近くを歩いています。すると、友達がさきちゃん[しんくん]に水をかけてしまったので、さきちゃん[しんくん]は怒っています。今、さきちゃん[しんくん]はあまり怒った顔をして友達を悲しませたくないと思っています。
両方	みかちゃん[れんくん]はブランコの順番を待っています。そこへ友達がやってきて、みかちゃん[れんくん]の前に割り込んだので、みかちゃん[れんくん]は怒っています。今、みかちゃん[れんくん]には2つの気持ちがあります。1つは怒った顔をして今度割り込んだらもう一緒に遊びたくないと伝えたいという気持ちです。もう1つはあまり怒った顔をして友達を悲しませたくないという気持ちです。

かな、怒っている顔かな、とても怒っている顔かな。」と尋ね、怒りの表出の程度の異なる4つの表情から主人公の表情を選択してもらった。表情選択課題のお話を Table 1 に示す。また、表情選択課題で使用した図版を資料1および資料2に示す。なお、表情選択課題のお話および図版は平川(2009)で使用したものを修正して使用した。

(2)適切さ評定課題

この課題は、主人公が置かれた状況、そのときの主人公の動機、主人公の表情から、主人公の動機に対する表情の適切さを評定する課題である。具体的には、まず3枚の図版を用いて友達から被害を受ける場面において主人公が「怒っている」という状況、主人公の動機、主人公の表情を提示した。次に、主人公の情動、動機、表情についてもう一度確認した上で、「このとき○○ちゃん[くん] (主人公)のこの顔はこの気持ち(動機)とどれくらい合っているかな。合っているかな、あまり合っていないかな、合っていないかな。」と尋ね、主人公の表情が動機とどの程度合っているかを〈合っている〉〈あまり合っていない〉〈合っていない〉から評定してもらった。適切さ評定課題のお話を Table 2 に示す。また、適切さ評定課題で使用した図版を資料3および資料4に示す。なお、適切さ評定課題のお話および図版は平川(2009)で使用したものを修正して使用した。

Table 2 適切さ評定課題の内容

課題	状況
主張	ゆきちゃん[りょうくん]はボールを投げて遊んでいます。そこへ友達がやってきて、「サッカーをしよう」と言ってボールを取ってしまったので、ゆきちゃん[りょうくん]は怒っています。今、ゆきちゃん[りょうくん]は怒った顔をして今度ボールを取ったらもう一緒に遊びたくないと伝えたいと思っています。このとき、ゆきちゃん[りょうくん]はあまり怒っていない顔をしました。
友好	りさちゃん[ひでくん]は絵を描いて遊んでいます。そこへ友達がやってきて、りさちゃん[ひでくん]の絵を破ってしまったので、りさちゃん[ひでくん]は怒っています。今、りさちゃん[ひでくん]はあまり怒った顔をして友達を悲しませたくないと思っています。このとき、りさちゃん[ひでくん]は怒った顔をしました。

3. 結果

(1)表情選択課題

まず、怒りをより強く表現すると回答したほうが得点が高くなるように、〈普通の顔〉は1点、〈あまり怒っていない顔〉は2点、〈怒っている顔〉は3点、〈とても怒っている顔〉は4点として得点化を行った。その上で、主張課題と友好課題について2(学年)×2(動機)の二元配置の分散分析を行った。その結果、学年の主効果(F(1,93)=4.76, p<.05)と動機の主効果(F(1,93)=8.43, p<.01)がそれぞれ有意であり、年長児よりも年中児のほうが、また友好的

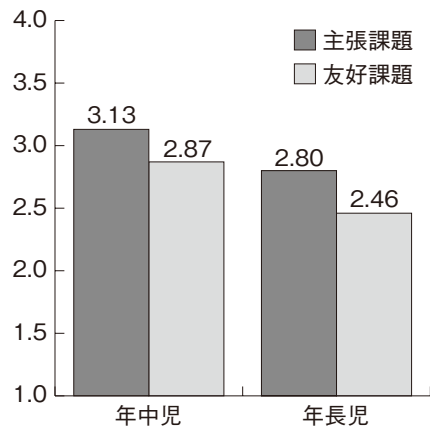


Figure 1 表情選択課題における学年別平均得点

動機よりも主張的動機をもっている場合のほうが、怒りをより強く表現すると理解していることが明らかになった (Figure 1)。しかしながら、主張課題における平均得点をみると年中児では3.13、年長児では2.80であり、主張的動機をもっている場合でもそれほど強い怒りの表現を選択しているわけではないことが分かる。

次に、各課題において各選択肢を選択した割合を Figure 2、Figure 3、Figure 4に示す。Figure 2を見ると、主張課題では〈怒っている顔〉を選択した者は年中児で56.4%、年長児で41.1%であり、最も多く選択されていることが分かる。一方、Figure 3より友好課題で最も多く選択されたのは、年中児では〈怒っている顔〉であるのに対して年長児では〈あまり怒っていない顔〉であった。さらに、主張的動機と友好的動機の両方が与えられた両方課題で最も多く選択されたのは、年中児では〈怒っている顔〉、年長児では〈あまり怒っていない顔〉であった (Figure 4)。

これら3つの課題の回答結果をみると、提示された動機はそれぞれ異なるにもかかわらず、年中

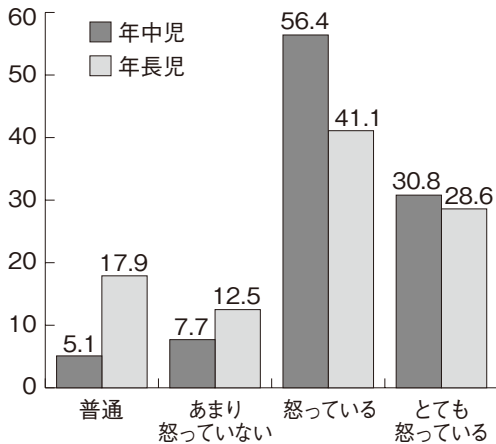


Figure 2 主張課題における学年別の選択者の割合

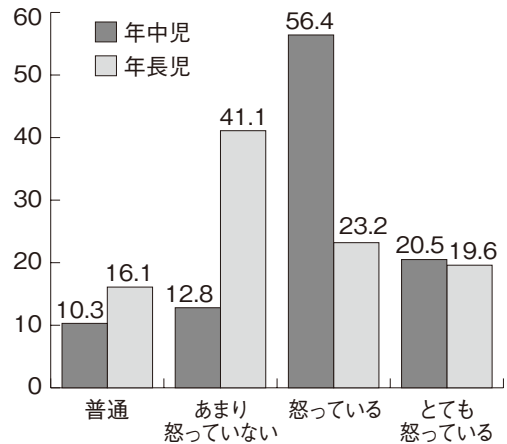


Figure 3 友好課題における学年別の選択者の割合

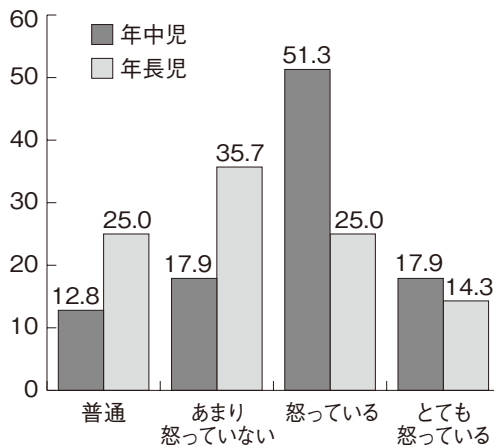


Figure 4 両方課題における学年別の選択者の割合

児はいずれの課題においても半数以上が〈怒っている顔〉を選択していることが分かる。これには表情選択課題で用いられた場面がすべて主人公が「怒っている」場面であったことが影響している可能性がある。年中児では、主人公の情動と一致する〈怒っている顔〉が選ばれやすかったのかもしれない。一方、年長児の回答結果をみると課題によって選択の傾向が異なっており、提示された動機を達成するような情動表現を選択していることがうかがえる。しかしながら、年長児でも主張課題では〈普通の顔〉を17.9%、〈あまり怒っていない顔〉を12.5%が選択しており、主張的動機があるにもかかわらず抑制的な表現を選択した者が少なからず含まれていたことが分かる (Figure 2)。

(2)適切さ評定課題

まず、適切さを理解しているほうが得点が高くなるように、〈合っている〉は1点、〈あまり合っていない〉は2点、〈合っていない〉は3点として得点化を行った。その上で、主張課題と友好課題について2(学年)×2(動機)の二元配置の分散分析を行った。その結果、学年の主効果が有意傾向であり (F(1,38)=3.15, p<.10)、動機に対する情動表現の適切さについては年中児よりも年長児のほうが理解している傾向があることが明らかになった (Figure 5)。

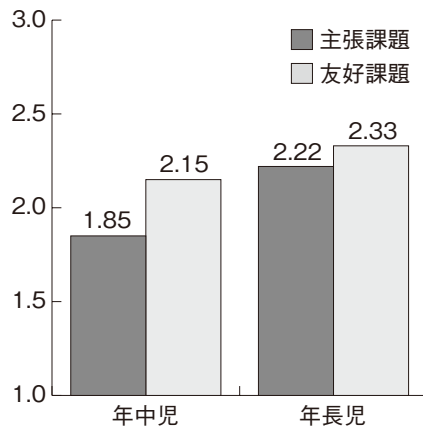


Figure 5 適切さ評定課題における学年別平均得点

次に、各課題において各選択肢を選択した割合を Figure 6、Figure 7に示す。主張課題において χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意だった ($\chi^2(2)=8.59, p<.05$)。残差分析の結果、〈合っている〉を選択した者は年中児では多く、年長児では少なかった (Figure 6)。友好課題においても

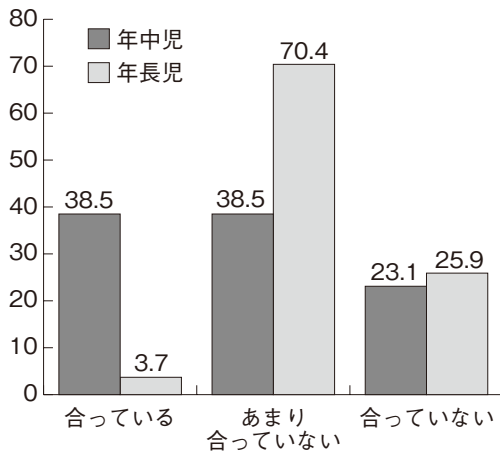


Figure 6 主張課題における学年別の選択者の割合

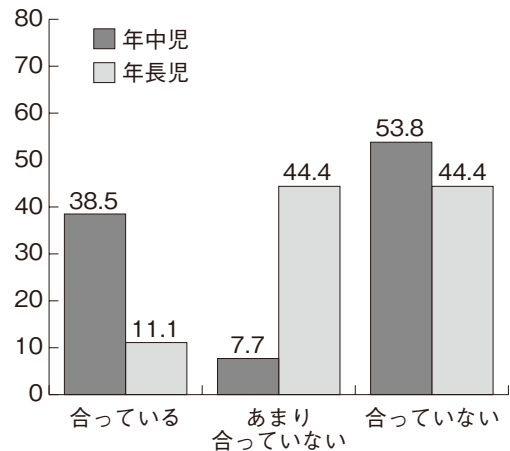


Figure 7 友好課題における学年別の選択者の割合

χ^2 検定を行ったところ、人数の偏りは有意だった ($\chi^2(2)=7.09, p<.05$)。残差分析の結果、〈合っている〉を選択した者は年中児では多く、年長児では少なかった。また、〈あまり合っていない〉を選択した者は年長児では多く、年中児では少なかった (Figure 7)。

(3)表情選択課題と適切さ評定課題との関連

表情選択課題の主張課題において〈怒っている顔〉を選択した年中児と年長児ではその背景となる理解に違いがあると思われた。そこで、表情選択課題の主張課題において〈怒っている顔〉を選択した年中児22名、年長児23名について、適切さ評定課題の主張課題の評定を調べた。その結果、年中児では15名(68.2%)、年長児では22名(95.7%)が適切な回答(〈あまり合っていない〉または〈合っていない〉)を選択をしていた (Figure 8)。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であり ($\chi^2(1)=5.81, p<.05$)、不適切な回答をした者は年中児で多く、年長児では少なかった。これより、〈怒っている顔〉を選択した者の中には、主張的動機に対する情動表現の適切さについての理解が不十分な者が含まれており、それはとりわけ年中児において顕著であると考えられる。したがって、同じように〈怒っている顔〉を選択していたとしても、その背景にある理解が年中児と年長児では異なる可能性があると推測される。

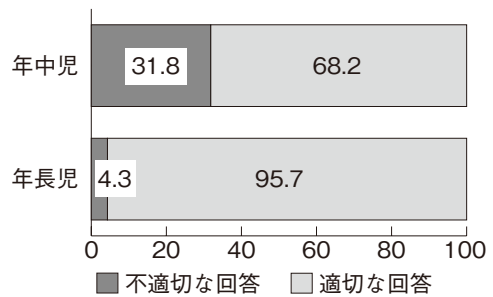


Figure 8 表情選択(主張課題)において〈怒っている顔〉を選択した者の適切さ評定(主張課題)における回答結果

4. 考察

本研究では幼児期において情動表現の理解、とりわけ主張的な情動表現の理解がどのように発達するのかを明らかにすることを目的とした。本研究の結果から、年長児よりも年中児のほうが怒りを強く表現すると理解していること、逆に言えば年中児よりも年長児のほうがより抑制的な情動表現を行うと理解していることが明らかになった。これは平川(2008)で得られた結果と一致している。従来の研究で明らかにされてきたように、情動表現の抑制的側面に関しては年齢とともに抑制的な表現をするようになることが本研究においても示されたと言える。一方、主張的動機をもっている場合も年長児よりも年中児のほうがより強く怒りを表現すると理解していたが、このような結果が得られた背景には次の2つの事柄が関与していると考えられる。第一に、年長児の場合には抑制が働いた結果として情動表現の強さが弱められたということである。前述の通り、年長児の中には主張的な動機が明示されているにも関わらず怒りの程度を弱めて表現すると理解した子どもが少なからず含まれていた。主張的行動(assertive behavior)や主張性(assertiveness)の概念には、単に自分の気持ちや考えを主張するだけでなく、攻撃的でなく社会的に受け入れられるようなやり方で主張するというような抑制的な側面も含まれている。単に自分の気持ちを相手に伝えるというこ

とだけでなく、相手との関係を維持するということが同時に考慮できるようになったというように、2つのことを同時に考慮できるようになったという認知発達の結果として、年長児では情動表現はその強さが弱められた表現になったと考えられる。第二に、年中児の中には動機として示された目標を達成するための表現としてではなく、単なる情動の表出として表情を選択した者が含まれている可能性がある。表情選択課題のいずれの課題においても主人公の情動と同じ表情を選択している者が年中児では半数以上いたことから、年中児の場合は「怒っているときには怒っている顔をする」というように表情を単なる情動の表出として捉えていた者が少なからず含まれていたと考えられる。Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson(1986)や Josephs(1994)をはじめとする多くの研究において、4歳から6歳にかけて本当の情動とみかけの情動(本当の情動とは異なる情動の表出)を区別する能力が発達するという結果が得られている。このことを踏まえると、年中児の場合には本当の情動とみかけの情動の区別が不十分であり、単なる情動表出の結果として表情を捉えていたのに対して、年長児の場合にはそれらを年中児よりも明確に区別し、目標を達成するための手段として表情を捉えていたと推測される。

本研究から年中児から年長児にかけて情動表現とその動機との関連についての理解が深まってくることが示され、主張的な情動表現においては抑制と主張の両側面が同時に働いた結果として情動表現が生じると推測された。また、小学1、2年生を対象とした平川(2009)では、友達から被害を受けて友達に謝ってほしいと思っている場面で〈少し怒っている顔〉をすると回答した理由として「あまり怒りすぎると(友達は)謝ってくれない」「普通の顔だと(友達は)怒っていると分からないから謝らない」ということを挙げた被験者が複数いた。このことから、相手に行動変容や謝罪を求めるといような主張的な動機をもっている場合、そのような行動を相手にとらせるためにはどの程度怒りを表現したらよいかということを考え、情動表現の強さを調節することが対人関係においては必要になると考えられる。そしてこのような情動表現が自分の気持ちを相手に伝える役割を果たすだけでなく、同時に相手に対する配慮や相手との関係を確立・維持することにもつながるのだろう。

最後に、本研究の問題点として課題の複雑さが挙げられる。本研究では絵カードを用いながら架空のお話を提示し、そのお話に関する質問をするという方法を用いて実験を行った。課題の提示にあたっては、質問の前にもう一度お話の内容を繰り返すという手続きをとるなど、課題自体の理解の不十分さが結果に与える影響をできるだけ小さくするよう心がけたが、特に年中児の中には課題自体を十分に理解できなかつた子どもが含まれていたと推測される。今後は、対象児の言語理解の程度によって結果が大きく左右されることがないように、課題の提示方法を工夫することが必要であると考えられる。

【文献】

- 崔京姫・新井邦二郎。(1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係. *教育心理学研究*, 46, 432-441.
- Cole, P. M. (1986). Children's Spontaneous Control of Facial Expression. *Child Development*, 57, 1309-1321.

幼児における主張的な情動表現の理解に関する研究

- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1987). 表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる. (工藤力, 監訳). 東京: 誠信書房. (Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. New Jersey: Prentice Hall.
- Harris, P. L. (1989). *Children and Emotion*. Basil Blackwell.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's Understanding of the Distinction between Real and Apparent Emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- 平林秀美・柏木恵子. (1993). 情動表出の制御と対人関係に関する発達の研究. *発達研究*, 9, 25-39.
- 平川久美子. (2008). 幼児における情動表出の制御の理解に関する研究—制御の動機に着目して—. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 57(1), 311-326.
- 平川久美子. (2009). 児童期初期における情動表出の制御の理解に関する研究—主張的動機に着目して—. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 57(2), 219-238.
- Josephs, I. E. (1994). Display rule behavior and Understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, 18, 301-326.
- 柏木恵子. (1988). 幼児期における「自己」の発達. 東京: 東京大学出版会.
- 木野和代. (2003). 怒りの表出行動とその結果—怒りの表出が必要な場面に焦点をあてて—. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学)*, 50, 185-194.
- 子安増生・鈴木亜由美. (2002). 幼児の社会的問題解決能力と心の理論の発達. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 48, 63-83.
- 久保ゆかり. (2006). 幼児期における感情表出についての認識の発達—5歳から6歳の変化. *東洋大学社会学部紀要*, 44(2), 89-105.
- 溝川藍. (2007). 幼児期における他者の偽りの悲しみ表出の理解. *発達心理学研究*, 18, 174-184.
- 溝川藍・子安増生. (2008). 児童期における見かけの泣きの理解の発達: 二次的誤信念の理解との関連の検討. *発達心理学研究*, 19, 209-220.
- 内田伸子. (1991). 子どもは感情表出を制御できるか—幼児期における展示ルール (display rule) の発達. *日本教育心理学会第33回総会発表論文集*, 109-110.
- 山本愛子. (1995). 幼児の自己調整能力に関する発達の研究—幼児の対人葛藤場面における自己主張解決方略について—. *教育心理学研究*, 43, 42-51.

【資料】

<p>じゅんくんは積み木でお家を作って遊んでいます。</p>	<p>そこへ友達がやってきて、お家を壊して積み木を取ってしまったので、じゅんくんは怒っています。</p>	<p>今、じゅんくんは、怒った顔をして今度お家を壊したらもう一緒に遊びたくないと思えたいと思っています。</p>

資料1 表情選択課題(主張課題)の刺激図版(男児用)

<p>ふつう</p>	<p>あまり おこっていない</p>	<p>おこっている</p>	<p>とても おこっている</p>

資料2 表情選択課題の選択肢

<p>ゆきちゃんはボールを投げて遊んでいます。</p>	<p>そこへ友達がやってきて、「サッカーをしよう」と言ってボールを取ってしまったので、ゆきちゃんは怒っています。</p>	<p>今、ゆきちゃんは怒った顔をして今度ボールを取ったらもう一緒に遊びたくないと思えたいと思っています。このとき、ゆきちゃんはあまり怒っていない顔をしました。</p>

資料3 適切さ評定課題(主張課題)の刺激図版(女児用)

<p>あっている</p>	<p>あまり あっていない</p>	<p>あっていない</p>

資料4 適切さ評定課題の選択肢

The Understanding of Assertive Emotional Expressions in Young Children

: On the Expressions of Anger

Kumiko HIRAKAWA

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of the present study was to investigate children's understanding of emotional expressions. The participants were 39 four-year-olds and 56 five-year-olds in two kindergartens. There were two tasks about the expressions of anger. They were included the character's motives for emotional expressions. In "Face Choice Task", participants were asked to choose the facial expressions of the characters in three stories. One story included the motive that the character wanted to stop his/her friend's behavior ("Assertion Motive"). Another one included that the character did not want to make his/her friend sad ("Keep Friendship Motive"). The other one included both motives. In "Rating Task", participants were asked to rate the appropriateness of the character's facial expressions for his/her motives in two stories. One story had "Assertion Motive" and the other had "Keep Friendship Motive".

The main results were as follows:

1. Younger children chose the stronger anger facial expressions than older children in "Face Choice Task",
2. In "Face Choice Task", children chose the stronger anger facial expressions in "Assertion Motive" situation than in "Keep Friendship Motive" situation.
3. Older children rated the character's anger facial expression more appropriately than younger children in "Rating Task".

It was suggested that older children understood the relation between emotional expressions and motives better than younger children.

Key words : emotional understanding, emotional expressions, "Assertion Motive", anger, young children